

インタビュー調査に基づいた バルト3国のロシア語系住民の言語状況の考察¹

堀口大樹

《要旨》

本論文の目的は、インタビュー調査に基づき、バルト3国におけるロシア語系住民の民族意識、国民としての意識、またロシア語や国家語に対する意識を明らかにすることである。ソビエト連邦の崩壊後、バルト3国では、ロシア語を母語とする、様々な民族のロシア語系住民が数多く残った。しかし、各国では社会を国家語で統合するために強力な国家語政策が今日まで展開されてきた。民族意識に関しては、ロシアのロシア人とも、バルト3国の基幹民族とも異なる、ロシア語系住民としてのアイデンティティが形成されている。国家語への姿勢については、その知識が義務であることに抵抗感を持つ者が未だいる一方、国家語を国家に対する忠誠の現れや社会への統合手段とみなして肯定的な姿勢を持つ者もいる。概して、国家語を基盤として、多民族社会の統合は若年層や社会的に活動的なロシア語系住民を中心に進んでいる。

《キーワード》

バルト3国、ロシア語系住民、国家語、アイデンティティ

1. 序論

1.1. はじめに

バルト3国は1991年にソ連からの独立回復後、2004年にEUおよびNATOに加盟してヨーロッパに回帰した。ヨーロッパの中でもロシアに国境を接し、地政学的に重要な地域に位置している。2017年時点の人口はエストニアで131万5635人、ラトビアで195万116人、リトアニアで289万297人である。² それぞれの国は歴史や風土、宗教も異なる。例えばエストニアは地理的、文化的にフィンランドに近く、北欧への帰属意識が3国の中で

¹ 本研究は、科研費『オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究』（16H05657、代表：柳田賢二）の助成を受けたものである。

² 本論文で示す統計は各国の統計局によるものである。エストニア：エストニア統計局（Eesti statistika, <http://www.stat.ee>）、ラトビア：ラトビア中央統計局（Latvijas Centrālā statistikas pārvalde: <http://www.csb.gov.lv>）、リトアニア：リトアニア統計局（Lietuvos statistikos departamentas, <http://www.stat.gov.lt>）



最も高い。ラトビアは3国の中心に位置し、ドイツ、スウェーデン、ロシア、ポーランドといった周辺の大国の影響を受けている。リトアニアは歴史的にポーランドとの関係が深く、中世にはポーランド王国との国家合同でリトアニア大公国として一大覇権を手に入っていた。宗教は、エストニアとラトビアではプロテスタント、リトアニアではカトリックが優勢である。

周知のとおり、ソ連の中では多数派の民族であったロシア人は、ソ連崩壊後に独立を果たした各共和国で基幹民族に対して少数民族となった。バルト3国における基幹民族とロシア人の割合は、エストニアでは68.7%と25.0%（2017年）、ラトビアでは62.0%と25.4%（2017年）、リトアニアでは87.0%と5.0%（2016年）となっている。エストニアとラトビアに関しては、少数民族とは言い難い割合のロシア人が住んでいる。現在のバルト3国では、ロシア人およびロシア語系住民は、ロシア語を母語としつつも、各国の国家語の知識を様々なレベルで有し、それを用いて生活している。

バルト3国におけるロシア語系住民について、社会学ではLaitin 1998³ や Cheskin 2017⁴ の研究が有名であるが、バルト3国全体を対象とした研究は多くない。ヨーロッパとしてのバルト3国とロシアの狭間で、また再独立時代とソ連時代を比較して、彼らは今日どのような民族意識や国民としての意識、ロシア語や国家語に関する意識を持っているのか。ソ連時代から現在に至るまでの彼らのオーラルヒストリーを、インタビュー調査で明らかにする。

1.2. インタビュー調査の概要

第1回の調査は2017年8月14日から8月29日までラトビア（リーガ Rīga、ダウガウピルス Daugavpils）とリトアニア（ヴィリニウス Vilnius、ヴィサギナス Visaginas）で計42人に対して、第2回の調査は2018年8月27日から9月9日までラトビア（リーガ）とエストニア（タリン Tallinn、タルトゥ Tartu、ナルヴァ Narva）で計39人に対して行った。

質問事項には大きく分けてふたつの軸を設けた。ひとつ目は、現在と比較したソ連時代の社会や日常生活、文化や人間関係といった社会学、文化学的なテーマである。ふたつ目は、ロシア語系住民としての自意識や母語としてのロシア語に対する意識、ロシアのロシア人、各バルト3国の基幹民族に対する意識、国家語に対する意識といった社会言語学的テーマである。本論文で分析するのは、後者の社会言語学的テーマに関するインフォーマ

³ Laitin, David. (1998) *Identity in Formation. The Russian-speaking Populations in the Near Abroad*, Ithaca and London: Cornell University Press.

⁴ Cheskin, Ammon. (2016) *Russian Speakers in Post-Soviet Latvia. Discursive Identity Strategies*, Edinburgh: Edinburgh University Press.

ントの回答である。調査は対面形式によりロシア語で行われた。

調査を行った都市とインフォーマントの性別と生年は以下の通りである。

国	都市	人数	性別		年代						
			男	女	80	70	60	50	40	30	20
エストニア	タリン	12	3	9	0	8	2	2	0	0	0
	タルトゥ	12	5	7	2	5	4	1	0	0	0
	ナルヴァ	9	5	4	0	2	1	2	4	0	0
ラトビア	リーガ	24	7	17	4	2	4	7	3	3	1
	ダウガウピルス	3	0	3	0	0	2	1	0	0	0
リトアニア	ヴィリニユス	10	5	5	2	2	2	4	0	0	0
	ヴィサギナス	11	3	8	6	1	2	2	0	0	0
	合計	81	28	53	14	20	17	19	7	3	1

表 1：都市別のインフォーマントの内訳

インフォーマントはすべて一般市民でロシア語を母語とし、後述するように、いわゆるロシア語系住民である。各国の国家語の知識に関しては、あくまで自己評価ではあるものの、基本的な運用能力しか解さないという者から、ロシア語と並んで母語レベルと申告する者までおり、一様ではない。民族的にはロシア人が多いが、ポーランド人、ベラルーシ人、ウクライナ人、ユダヤ人、アルメニア人などのほか、異民族間の結婚によって生まれた者もいた。インフォーマントの出生地は、バルト3国のほか、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ウズベキスタン、タジキスタン、カザフスタンなどの旧ソ連の他の共和国と様々であった。東ドイツやハンガリーなど海外で生まれたインフォーマントもいた。

調査時間はインフォーマント1人または2人に対して、1時間から2時間の間で行い、2回の調査で合計91.5時間となった。インフォーマントの選定や調査の日時の調整は、各都市のコーディネーターに依頼した。

1.3. バルト3国における言語政策

バルト3国の各言語の系統については、エストニア語がウラル語族のフィン・ウゴル語派、ラトビア語とリトアニア語がインド・ヨーロッパ語族のバルト語派に属する。どの言

語も、第1次独立時代も含む19世紀末から20世紀前半にかけて標準語が形成された。バルト3国の各言語はソ連時代よりも以前に標準語の基盤がすでに形成されていたため、ソ連時代のロシア化政策にも関わらず、教育、学術、文化、事務など社会の様々な場面で民族語が使用されていた。バルト3国の民族のアイデンティティにおいて言語が占める位置は非常に大きい。いわゆる言葉の乱れに関しても敏感である。

ソ連崩壊後に独立を回復したバルト3国は、それぞれエストニア語、ラトビア語、リトアニア語を唯一の国家語として憲法で定め、国家語法をもとに、市民権、教育、経済、メディアといったあらゆる社会の分野で強力な言語政策を展開してきた。これは、国家語の社会的権威を高めるとともに、ソ連時代に優勢だったロシア語の公的場面での使用を制限し、国内に残ったロシア語系住民を含む多民族社会を国家語により統合するためである。とりわけエストニアとラトビアに関しては、ソ連による占領が始まったとされる1940年6月16日（エストニア）または17日（ラトビア）以降にソ連の他の地域から移住してきた者とその子供に対して、再独立後に市民権を自動的に与えない厳しい政策を取った。これにより、ソ連崩壊後には国内に多くの非市民（non-citizens, неграждане）が生まれた。帰化に際しては、憲法や歴史の知識のほか国家語の知識が求められる。2017年時点でエストニアでは国内の人口の5.9%が、ラトビアでは11.4%がまだ非市民とされる。

バルト3国には、ロシア語も含む国家語以外の言語で教授を行う少数民族学校が存在する。エストニアとラトビアでは、国立の少数民族学校において一定以上の学年で科目の60%以上を国家語で教授しなければいけない法律が、ラトビアでは2004年に、エストニアでは2012年に採択された。この改革には保護者や学校の教師がデモを行うなどし、社会的に大きな議論となった。

バルト3国には、社会における国家語の使用を監視する公的機関が存在する。エストニアでは言語監督庁 Keeleinspeksioon、ラトビアでは国家語センター Valsts valodas centrs、リトアニアでは国家言語監督庁 Valstybinė kalbos inspekcija があり、公的場面において国家語が使用されているか、民間企業が消費者に国家語でサービスを提供しているかを調査、監視する。こうした機関による監視は、一部のロシア語系住民の反感を買っている。

国民の言語能力について、基幹民族のロシア語能力とロシア語系住民の国家語能力を分けて示す。現在のバルト3国では、とりわけ若年層においてロシア語の知識は当たり前のものではなく、英語に次ぐ外国語としての地位を保持しているにとどまっている。ロシア語系住民が多い地域では基幹民族のロシア語能力は全体的に高い。ロシア語系住民の国家語能力については、若年層や経済的に活発な人ほど高い。ロシア語系住民が多い地域では、学校で国家語を習ったとしても実際に使う機会が少ないために、上達しにくいとい

った問題もある。民間企業では、ホームページや広告、サービスを国家語とロシア語の2言語で提供する企業もある。顧客の言語に合わせて対応する傾向があることから、労働市場では国家語に加えてロシア語の知識が歓迎されることが珍しくない。よってロシア語を母語とし、国家語も習得する機会があるロシア語系住民の方が基幹民族よりも有利であるとする意見も存在する。

1.4. “ロシア語系住民”という呼称

“ロシア語系住民”という呼称は、主にロシア連邦以外でロシア語を母語とする民族的なロシア人のほか、民族間交流言語としてのロシア語の実用性やソ連時代のロシア化政策の影響により、民族的にはロシア人でなくてもロシア語を第一言語として使用する者を指す。ロシア語では *русскоязычные* または *русскоговорящие*、英語では *Russian speakers* または *Russian-speaking population* に相当する。バルト3国の各言語でも、エストニア語では *venekeelne elanikkond*、ラトビア語では *krievvalodigie*、リトアニア語では *rusakalbiai* といった呼称が存在している。国内における民族的なロシア人の割合はラトビアが最も高く25.4%（2017年）、エストニアが25.0%（2017年）、リトアニアがわずか5%（2016年）となっている。ベラルーシ人やポーランド人のように、基幹民族やロシア人でない場合、言語的にはロシア語の使用が優勢であることが多い。リトアニアではロシア人よりもポーランド人の方が6%（2016年）と数が若干多い。ロシア語系住民の正確な数の把握は難しいが、国内の民族的ロシア人に一定の割合を加えた数が各バルト3国の実際のロシア語系住民の数となる。

多くのロシア語系住民はソ連時代にバルト3国に移住し、工業が発達した大都市に多く暮らしている。各国ともにロシア語系住民が多数派を占める都市があり、国内でやや特殊な位置づけをされる。本調査では以下の3都市も調査対象とした。エストニアでは、ロシアのイワンゴロド（Ивангород）とナルヴァ川を挟んで国境を接するナルヴァがあり、人口の87.6%（2017年）がロシア人である。ラトビアでは、ベラルーシとロシアに近い東部にダウガウピルスがあり、ロシア人の割合は49.4%（2017年）である。リトアニアのヴィサギナスは、1983年に運転を開始したイグナリナ原発の関係者のために1975年に建設された計画都市で、旧称はスニェチュクス（*Sniečkus*）である。ロシア人の割合は52.1%（2011年）となっている。

2. インタビュー調査の結果より

本章では、インタビュー調査をもとに、各バルト3国のロシア語系住民の民族意識、ロ

シア語、国家語、社会統合に関する意識を考察する。インフォーマントの発言の後には、基本的情報として調査地、性別、生まれた年代を示した。例えば Tallinn70M とはタリン在住、1970 年生まれ、男性のインフォーマントを指す。

2.1. 民族意識

2.1.1. 自己の民族の規定

自己の民族の規定の明確さはインフォーマントにより様々である。まずは、明確に自己の民族を規定しているインフォーマントを紹介する。

「ロシア人。ロシア文化の中で育ったし、偉大な文化に属していることに誇りがある」
(Narva57M)

「ロシア人。母語がロシア語で、文学やソビエト映画といったロシア文化の中で育った」
(Rīga80F)

「ロシア人。祖先が古儀式派で、ずっとラトビアに住んできた。ロシアに親戚はいない」
(Rīga58M)

「ロシア人。家族はザラサイ (Zarasai) に住んでいた古儀式派。パスポートにも“ロシア人 (rusas)” と記載してあり、誇りに思う」 (Visaginas85M)

「ベラルーシ人。年をとるごとにそう感じる。ベラルーシに帰省するたびにエネルギーをもらう」 (Rīga56F)

「おそらくポーランド人。母語はロシア語だけど、祭日や食事、内面の文化はロシアよりもポーランドに近いので。文化と言語は分けている」 (Vilnius73F)

「ロシア人」と答えた場合、ロシアに住むロシア人との違いに自ら言及するインフォーマントも複数いた。

「ロシア人 (русская) だけどロシアのロシア人 (россиянка) ではない」 (Tartu79F)

「ロシア人。ただしロシアに行くと違和感がある」 (Tallinn69F)

居住国に依拠した自己の定義をするインフォーマントや、外国人に対しては居住国の住民または民族として自ら名乗るインフォーマントもいる。自己の民族の定義をしつつも、居住国の外、とりわけロシアのロシア人からはロシア人として認められないと言うインフォーマントもいた。

「ロシア語系エストニア人 (русскоговорящая эстонка) であり、エストニア社会の一部」
(Tartu80F)

「エストニアに住む人 (эстоноземелец) だと思うが、エストニア人ではない。ロシア語を話す、ロシアには関係ないし、ロシア人ではない。世界の人 (человек мира)」 (Tartu74)

「ラトビア人、ロシア人、ロマ人、ポーランド人の血が入っている。ソ連時代は皆コスモポリタン (космополиты) だった」(Tallinn60F)

「外国人の前ではエストニア人という。生活や文化の点ではロシア語系エストニア人 (русскоязычный эстонец)」(Tartu76M)

「ロシア人だが、英語で話すときはエストニア人 (Estonian) という」(Tallinn75M)

「ラトビアのロシア人は皆ソ連時代にやってきたと思われがちだが、私は古くからいる (父親が古儀式派の) ロシア人。でもそういった事情を知らない海外の人にはロシア語がうまいラトビア人と思われてしまう」(Rīga80F)

「ソ連時代に他の共和国で兵役中、ラトビア育ちの自分は“ラトビア人 (латыш)”と呼ばれ、ロシア人として扱われなかった。リトアニアのロシア人も同様だった」(Rīga58M)

「ロシア人、またはエストニアのロシア人 (эстонский русский)。でもロシアに行くときいつも沿バルト人 (прибалт) と呼ばれた」(Narva66M)

民族と母語が一致しない場合や、両親同士が異民族の場合、民族の規定はより曖昧で困難なインフォーマントも見受けられた。

「父親がエストニア人、母親がロシア人。母語はロシア語で、地理、文化的にもロシアに近いのでロシア系エストニア人 (русский эстонец)」(Narva71M)

「父がウクライナ人、母がレニングラード州出身のフィンランド人、自分はエストニア生まれで国籍はエストニア。ロシア語で考え、母語はロシア語」(Tallinn75F)

「父親はチュヴァシ人、母親はベラルーシ人。自分はエストニア人。自分をエストニア系ロシア人 (эстонский русский)、または民族はソ連人 (национальность советская) だと思ふ」(Tartu62M)

「ラトビアで生まれ育ち、幼い頃はポーランド語を話していたが、母語はロシア語。自分は中途半端な存在 (размазня)」(Daugavpils61F)

「ロシア国民 (россиянка) でもないし、エストニア人 (эстонка) でもない。その中間 (прослойка)」(Tartu74F)

「父親がアゼルバイジャン人、母親がエストニア人。対外的にはエストニア人と答えるが、ロシア語で考え、勉強し、友人関係も文化もロシア語なのでロシア人とも言える。アゼルバイジャン語は知らないが、アゼルバイジャン人だとも思う。ロシア人の血は一滴も流れていないし、名前も名字も父称もロシア人ではないが、ロシア人にはロシア人として見られている。ロシア人の定義は広い」(Narva54M)

「父親がタタール・バシキール人、母親がロシア人、自分を特定の民族にはあてはめないが、おそらく自分をロシア人だと感じる。(…) 私はロシア人ではない。ロシア語系な

だけで、ロシア人ではない。私はリトアニア人でもないし、特定の民族と言い切れない」(Visaginas80F)

「民族については自分でもよく迷う。家系に従えば私はユダヤ人。パスポートと言語で言えばロシア人。単に私は人。ソ連時代に自分がユダヤ人だということを知る時知ったが、ユダヤ人の伝統は受け継いでいない」(Rīga73F)

このようにロシア語系住民の特徴は、民族の多様性や、混血などによる規定の曖昧さであり、唯一共通しているのが、国家語を様々なレベルで習得しつつも、ロシア語を母語としている言語的な点である。

2.1.2. 基幹民族に対する意識

自己の民族を意識することは、最も身近な他者である基幹民族を意識することでもある。各バルト3国の基幹民族に対しては、控えめ(сдержанные)で、気軽には打ち解けない(закрытые)、静か(спокойные)という回答が多くみられた。この理由として、エストニア人、ラトビア人、リトアニア人は歴史的に一世帯や数世帯からなる農園(хутор)に住み、周囲との接触が少なかったことが挙げられた。この“農園”という言葉と言及したインフォーマントが各バルト3国を通じて確認された。

「ロシアのロシア人はコルホーズのような大きな集団で生活して、人との付き合いがいつもあったのに対して、リトアニア人は農園に住んでいた。建物がひとつで1世帯しか住んでいないような」(Vilnius82M)

「昔だったら隣の農園までは10キロ離れていて、よくても週に1回会うだけのような孤立した生活」(Rīga61F)

「ロシアの村とエストニアの農園の違い。家がたくさんあるか、家がぽつんと立っているだけかの違い」(Tartu74F)

行動や発言をする前にロシア人よりもよく考えるといった思慮深さ(рассудительность)もバルト3国の基幹民族の共通の特徴として挙げるインフォーマントが見受けられた。

「ラトビア人は物事を言う前によく考える」(Rīga51F)

その他、各バルト3国で4年または5年に1度行われる歌と踊りの祭典に代表される合唱やフォークロアの文化、夏至のお祝いに見られるキリスト教以前の自然信仰の伝統を今でも残していることが挙げられた。

2.1.3. ロシアのロシア人に対する意識

概してバルト3国のロシア人は基幹民族に影響を受けて現地化しており、ロシアのロシ

ア人と比較して、よりヨーロッパ的な価値観を持っていると言える。

「ロシアのロシア人は集団主義、バルトのロシア人は個人主義、実利主義」(Vilnius73F)

「ヨーロッパ的な閉鎖性がある。ロシアのように公共の場で誰かの質問に、それを聞いている他の人が答えることはない。ここでは皆黙っている」(Rīga69F)

「助け合いをしない。助けられると、自分も助けないといけないから」(Vilnius82M)

「おとなしい (сдержанные)。知らない人の前で罵り言葉は使わない」(Rīga32M)

自国の外で見かけるロシアのロシア人に対して好印象を持たず、周囲からロシアのロシア人と同一化されたくないという意見もあった。近年のロシアにおける愛国心の高揚に違和感を持つという、スポーツ関係者のインフォーマントもいた。

「海外で周りの人の言葉がわかるとリラックスできない。ロシアのロシア人観光客は列に並ばなかったり、声が大きかったりするので、彼らが多くいるホテルには泊まりたくない」(Tallinn69F)

「初めての海外 (チェコ) でのカルチャーショックは、現地の文化に対してではなく、ロシア人観光客を見た時だった。自分たちの言語がどこでも通じると思って、店員に横柄な態度をとっていた。それ以来チェコではロシア語を話さないようにしている」(Rīga80F)

「スポーツの国際試合ではロシア人の観客が一番目立つ。“自分たちは屈さない (мы не сдадимся)”、“自分たちは死なない (мы не умрем)”、“自分たちが一番” (мы самые первые) と証明したが。いつも戦っていて攻撃的。」(Tartu74M)

2.2. ロシア語に対する意識

2.2.1. ロシア語の使用

ソ連崩壊後、ロシア語は各共和国で少数民族となったロシア人の民族アイデンティティの中心的要素になったことはよく知られている。⁵ 国家語の強制によりロシア語に対する思い入れが強くなったとする声も実際に聞かれた。

「ラトビア語の知識を強制されたことで、ロシア語がより大事になった」(Rīga73F)

ロシア語系住民を国家語の知識を強いられている少数派の立場として見ることもできるが、一方で、母語としてのロシア語を労働市場において武器にできる若い世代の存在に触れたインフォーマントが複数いた。

「ロシア語を知らない (ラトビア人の) 若者は、いい仕事に就けない」(Rīga42F)

⁵ Apine, Ilga and Vladislavs Volkovs. (2007) *Latvijas krievu identitāte: vēsturisks un socioloģisks apcerējums*, Rīga: Latvijas Universitātes Filozofijas un socioloģijas institūts, pp. 131.

「若いエストニア人がロシア語を知らないのに対して、ロシア人はエストニア語、ロシア語、英語を知っているのが就職に有利」(Tartu65F)

バルト3国の公共空間は国家語による情報表示が優勢であるため、ロシアでロシア語の広告を見ることに新鮮さを覚えるインフォーマントもいた。

「ペテルブルグに行くと、キリル文字を広告で目にするのが新鮮なので、立ち止まってロシア語を読んでしまう」(Tartu76M)

バルト3国の国家語はいずれもラテン文字を使用している。日頃からラテン文字による署名に慣れており、多くのインフォーマントが本調査のアンケート用紙にラテン文字で署名をした。コンピューターやスマートフォンの普及により、現代人は手で文字を書く機会自体が減っているが、キリル文字を書くことに新鮮さや戸惑いを感じるインフォーマントも複数いた。

「事務作業はすべてラトビア語なので、ロシア語を手で書こうとすると考えてしまう」(Rīga55F)

また、バルト3国の言語には父称がないため、ロシア語が教授言語の学校の先生への呼びかけ以外では、名前+父称による呼びかけの文化は廃れつつあることは多くのインフォーマントから確認された。

2.2.2. “ロシア語系住民”という呼称に対する意識

2017年のインタビュー調査をもとにした当事者による本呼称に対する意識の考察⁶では、本呼称はメディアにおける政治的な文脈で基幹民族との対立を明確にすること、そして、民族的なロシア人以外にロシア語を母語とする民族に対する配慮を含むものの、民族的ロシア人は本呼称よりも“ロシア人”という呼称を好む傾向が明らかとなった。2018年のインタビュー調査でもおおよそ同様の意見が得られた。

侮辱的に聞こえるかどうかには個人差があるものの、国家語を母語とする基幹民族とそれ以外の人々を分断する表現として広く認識されている。

「国家語を勉強しようとしなくて、話せない人達を連想する」(Rīga80F)

「悪いニュースで用いられることが多い。“占領者(оккупанты)”というイメージがつきまとう」(Vilnius54M)

「自分たちが社会から引き離される言葉。国家語に対応する呼称。自分たちは邪魔者(лишние)、よそ者(чужие)で占領者。私たちは飛行機や列車に乗ってやってきた。戦車

⁶ 堀口大樹(2018)「ラトヴィアにおける多言語性」『スラヴ学論集』21号、34-35頁。

でやってきたわけではないのに」(Rīga66F)

「侮辱的に聞こえる。自分たちが育った社会は、皆同じで違いがなかったのに、民族で分けてほしくない」(Vilnius57F)

「侮辱的には思わない。リトアニア人と非リトアニア人を区別しているだけで、後者にはロシア人もポーランド人もタタール人もベラルーシ人も含まれる。ただし“私たちとは違う (вы не наши)”ということも強調されている」(Vilnius67F)

“二級品 (второй сорт)”という表現を用い、本呼称が基幹民族との上下関係を示すとするインフォーマントが複数いた。

「二級品のように扱われている」(Rīga47F)

「基幹民族に対して、ロシア人やポーランド人は二級品。皆リトアニア国民として平等であるべき、言語による区別をしてほしくない」(Visaginas54F)

“ロシア語系住民”に対して国家語の名称を用いた呼称が一般に使われないことから、呼称の非対称性に疑問を投げかけるインフォーマントも見受けられた。

「“ラトビア語系住民”という言い方はしないのに」(Rīga55F)

「民族的なロシア人以外も指しうる学術用語としてはいいが、自分は“ロシア人”を好む。イギリス人は“英語系”、リトアニア人は“リトアニア語系”と言わない。他は民族で括られるのに、どうして自分たちは言語で括られるのか」(Visaginas82F)

ロシア語を母語とするロシア人以外の民族に対する配慮の観点から、“ロシア語系住民”を“ロシア人”とは言わないこと、個別の民族に言及する必要性がないこと、別の呼称も考えられないことから、本呼称を便宜的とするインフォーマントもいた。

「呼称はまったく普通。たとえロシア語を話していてもウクライナ人に“ロシア人”とは言えない。“非エストニア人 (не-эстонцы)”と言うのも否定辞があるのでネガティブ」(Tallinn79M)

「ロシア語を話してロシア語で教育を受けた人すべてを指す。ロシア語でつながっている人達。ユダヤ人、ウクライナ人、ベラルーシ人、ポーランド人…民族ごとに名指しするのは不便」(Rīga61F)

リトアニアに比べてロシア語系住民が多いラトビアとエストニアではメディアにおいて本呼称が用いられることが多いと考えられる。しかしエストニアではこの呼称に対して慣れた、もしくは何も感じないというインフォーマントも複数いた。本呼称に関する意識の形成にはメディアにおける本呼称の使用が関わっているため、さらなる考察のためにはロシア語ならびにバルト 3 国の各言語でのメディアでの本呼称の使用を考慮に入れる必要がある。

2.3. 国家語に対する意識

2.3.1. ソ連時代における民族語の知識の必要性の低さ

ソ連時代ロシア語は民族間交流言語として機能していたため、多くのロシア語系住民にとって、現地の民族語の必要性は認識されていなかった。

「当初は1年の予定でラトビアに来た。ラトビア語を覚えたかったので、ラトビア人にラトビア語で私と話すよう頼んだが、“1年なんだからその必要はない。ロシア語の方がはやいから”と言って、皆私とロシア語で話していた。ラトビア人は今になってソ連時代にラトビア語を話さなかった不満を言うが、“あなた方はラトビア語を教えてくださいましたか？”と聞きたい」(Rīga51F)

「ソ連時代、学校以外にリトアニア語の必要性はなかった。一時的に住んでいるだけで、リトアニアに残ったとしても、ロシア語で事足りるヴィサギナスだった。必要性がなかったもので、習得は難しかった」(Visaginas83M)

「軍人の家庭ではラトビア語を軽視していた。インテリの家庭ではラトビア語やラトビア文化に敬意があった」(Rīga42F)

ロシア語を教授言語とする学校でも基幹民族の民族語を勉強する機会があったものの、基幹民族の民族語の教育レベルが低かったことを指摘するインフォーマントがバルト3国を通じて見られた。ソ連時代の民族語の教授法の不備は、インフォーマントにとって民族語を習得できなかった正当な理由のひとつとなるが、当時の教授法の問題が実際にあったかどうかは、外国語としての各言語の教授法の歴史を詳細に検討する必要があるだろう。

「当時は誰もロシア語話者向けのラトビア語の教授法を考えていなかった」(Rīga45F)

「ソ連時代週に1回エストニア語の授業があったが、教え方が悪かった。エストニア語で話すことはできなかった」(Tallinn69F)

一方でソ連時代から民族語を知っていたことで、民族的緊張関係が緩和されたと答えたインフォーマントもいたが、こういった事例は少数である。

「1950年代、ラトビア語を知らない母親は“ラトビアに住んでいるならラトビア語を知らないといけないよ”といつも言っていた。近所のラトビア人の子供たちにも、ラトビア語で娘の私に話しかけるように言っていた。相手の言語で話せることが教養の高さだと教えられた。ラトビア語を知っているおかげで、ラトビア人同僚との関係もよく、90年代でも自分が働いていたロシア語学科に対する風当たりはよかった」(Rīga45F)

2.3.2. 国家語に対する抵抗感

エストニアとラトビアの場合、国家語の知識がないことは市民権の問題や雇用機会が狭まることと関係している。本人がソ連時代にエストニアやラトビア国内で生まれたとしても、両親が他のソ連内の場所から移住してきた場合、独立回復後に市民権が与えられなかったことで、国家に対する失望は大きく、帰化自体のプロセスが侮辱的であったと感じる者は多い。

「ある時テレビをつけたらこの国の市民ではないと言われた」(Rīga73M)

「61年間ラトビアに住んでいて税金も払っているのに非市民で選挙権がない」(Rīga36F)

「競技スポーツをしていてエストニアの代表を目指していたが、市民権が与えられなかったので、競技を引退せざるを得なかった」(Tartu74M)

またロシア人学校を卒業した場合には国家語試験を受ける必要があり、6段階のカテゴリーによって就労可能な職種が定められている。

「仕事の面接でエストニア語を褒められ、顧客もロシア人が多かったので、ロシア語の知識も歓迎されたが、必要なカテゴリーを持っていなかったので採用されなかった」(Tallinn75F)

「自分はよい専門家と思われているが、ラトビア語の知識がないので、自分の可能性を十分に活かせていない」(Rīga66F)

「原子力発電所の建設計画の頓挫で、国家への信用が薄れ、リトアニア語を勉強したくなくなっている。でもリトアニア語ができないと、(市役所で働けないので)自分たちの都市の管理ができない」(Visaginas80M)

国家語の知識を強制と感じ、抵抗感をおぼえるインフォーマントもいる。

「無理せずに学べる条件を整えなかったことで、国家は多くの人を失った。知識を強制されたことで反抗心が生まれた」(Rīga66F)

「強制されていない時は楽しくエストニア語を学べた。試験を受けるのは侮辱的だった。エストニア語が必要にならない仕事の環境を自分で作った」(Tallinn60F)

高齢者の場合、言語の習得は容易ではない。年金生活の場合は必然的に関わる人間の関係も狭まるため、ロシア語だけで事足りてしまう生活を送ることになる。

「道端でわからないラトビア語があったので、70代くらいのラトビア人女性に聞いたら、ラトビア語で“どうしてラトビア語で話しかけないんですか？”と言われた。私は“見ての通り私は高齢でしょ。自分のロシア語ですら言うことを忘れるのに、どうしてそんなこと言うの？”と言った。彼女は黙って行ってしまった」(Rīga36F)

「障害があるので、国家語の試験なんて受けられない」(Rīga47F)

2.3.3. 国家語に対する肯定的な姿勢

言語は本来文化と密接に結びついているが、国家語としての地位が法的に規定されることで言語は国家とも結び付く。バルト3国のロシア語系住民にとって、国家語がどれだけ話せるか、そのためにどれだけ努力をしたかといった国家語への姿勢が、国家への姿勢と同一化されることがある。国家語を学び、使うことが、社会ひいては国家への忠誠 (loyalty) となるのである。基幹民族にとって国家語は民族語でもあるが、国家語への姿勢を、基幹民族の文化への姿勢だけでなく国家や社会への姿勢とも同一化する傾向がある。

ソ連崩壊後にバルト3国が独立国家になり、その基幹民族の言語が国家語になったことはロシア語系住民も認めている。国家語の知識を強制されていると感じないとするインフォーマントも多くいた。

「国が分離した以上、彼らの言語も文化も国旗も国歌も認めないといけない。それを受け入れられなかった人はここを離れたと思う」 (Vilnius60F)

「エストニア語の学習を強制と感じるロシア人がなぜかいるが、私はそうは思わなかった。試験を受けて忘れてしまうのではなく、ちゃんと使うために勉強していた。強制と感じるロシア人の方が多い。言語の知識はレンガが入ったリュックサックのように邪魔にはならない。言語の知識があると自信になる。私はタリンに行ってもエストニア語でどんな場面でも会話ができる」 (Narva49F)

「リトアニアに住みながら、リトアニア語をきれいに正しく話せないのが恥ずかしくて、個人授業に通った。リトアニアに住んでいるなら、自分をその国の一員として感じるべき。国が医療や教育を与えてくれるのだから」 (Vilnius83M)

国家語を習得したインフォーマントの中には、国家語を学ぼうとしない者が抱える問題を自身の責任として捉えるべきとする意見もあった。

「国家語を勉強しない人は、自分で自分の道を閉ざしているだけ」 (Narva49F)

「20年間も住んでいながら、少しもリトアニア語を話せず、リトアニアでロシア人として生きにくいと嘆く人がいるが、そういう態度は改めるべき。自分が住んでいる国に対する尊敬がない」 (Vilnius62F)

「何十年もここに住んでいて言語を学ぼうとしないのは理解できない。ロシア人はすぐ誰かのせいにしたがる。ラトビアの国家語がラトビア語なのは当然。どうしてロシア語が国家語として必要？ 普段の生活で人々は十分ロシア語で話せている」 (Rīga80F)

「住んでいる国の言語を知っていれば、良い仕事につけて周囲の見る目も変わることを理解していない人たちもいる。そういう人はロシアの大学を目指す」 (Visaginas85M)

「ロシアか西欧に移住するならともかく、ここで生きていく以上、リトアニア人じゃないなら出ていけ、といて追い出さなかった国に感謝するべき。リトアニア語を好きになるべきだし、初歩的なレベルでも習得するべき。両親がリトアニア語に対して否定的だと、子供もその姿勢を受け継ぐ」(Visaginas82F)

「ロシア語の国家語化は必要とは思わない。必要だと思う人は少数派。ロシア語が国家語になっても、エストニア語の知識の必要性は変わらない。エストニア人にロシア語の知識を強いるだけ」(Tallinn79M)

2.3.4. 国家語の使用における苦労やプレッシャー

国家語の使用に関する苦労は、仕事または大学入学時に見受けられる。後者に関しては、ロシア語で高等教育を受けられる機会が減ったソ連崩壊後、高校まではロシア語で学んできたが、高等教育を国家語で受けることになった世代に多い。

「大学に入ってからリトアニア語で議論の必要性があり、難しかった。でもリトアニア人と寮で同室になり、(リトアニア人が多い)カウナスだったこともあり、リトアニア語に慣れた」(Visaginas82F)

基幹民族から国家語の知識や使用に関するプレッシャーを感じつつも、いざ基幹民族と国家語でコミュニケーションをしていると、相手がロシア語を解する場合、相手からロシア語に切り替えてくるとするインフォーマントがいた。

「リトアニア人にリトアニア語で話しかけても、格変化などで間違いがあると相手の方からロシア語に切り替えてくる」(Visaginas60F)

「エストニア語がたどたどしいと、上の世代のエストニア人なら向こうからロシア語に切り替えてくる」(Tallinn75F)

「リトアニア語で書類を処理できていても、会話でたどたどしく話すと、リトアニア人の方から“耳が疲れるから”とロシア語に切り替える。リトアニア人は自分の言葉を大切にし、下手なリトアニア語を認めず直そうとする。これは心理的にリトアニア語を話しにくくしている原因」(Visaginas82F)

「聞き取れるが、いざ話すとなると言葉が出ないというコンプレックスが20年ほどあった。かつての私と同じように本当に話せない人がいるというのも事実。ただ私がコンプレックスを克服できてリトアニア語を話せるようになったら、今度はリトアニア人が(英語に次いで人気の外国語として)ロシア語を再び話せるようになっていた」(Vilnius62F)

インフォーマントによっては、完璧でないことを自覚しつつも率先的に国家語で話すことを選ぶ者もいる。

「ロシア語を忘れてしまった高齢のリトアニア人は、リトアニア語が話せない私の高齢の母親にたどたどしくもロシア語で話してくれる。それを見て、私も下手なりにリトアニア人にはリトアニア語で話すことに決めた。きれいなロシア語で話すよりも、その方がリトアニア人は快く思ってくれるから」(Vilnius67F)

「訛りはあるが、私が相手の言語で話そうとしていることを評価してほしい」(Visaginas84F)

相手がロシア語系住民であっても、ロシア語ではなく国家語を使うプレッシャーを感じているインフォーマントもいた。

「店員は国家語を話せなければいけないので、たとえ店員の名札に“タチヤナ”や“リュドミラ”と書いてあっても、本人の信用を損なわないためにリトアニア語で話しかける。ロシア語に切り替える時は、周りに誰かいないかを見る。苦情が(店員に対して)来るかもしれないので。街中で相手が絶対ロシア人だと思えばロシア語で話しかけるが」(Vilnius67F)

各バルト3国でロシア語系住民が集中している都市では、国家語を勉強しても日常生活ではロシア語のみで事足りてしまうことが多く、なかなか上達しないといった問題がある。調査を行ったどの都市でも国家語を使う機会の少なさを訴えるインフォーマントがいた。

「ソ連崩壊後にエストニア語の講座に通ったが、コミュニケーションの場がないのですぐに忘れた」(Narva57M)

「ダウガウピルスではラトビア語を使う機会が少ない」(Daugavpils62F)

「カウナスなどに行けばリトアニア語をすぐ習得できるだろうが、ここで講座に通っても職場に行くとロシア語で皆話すし、事務作業もロシア語なので忘れてしまう」(Visaginas50F)

2.3.5. 人名の現地語化—エストニアの名字変更の事例

人名の現地語化は、バルト3国全体において見られる。ロシア人の Михаил Титов という人名はエストニア語では Mihhail Titov、ラトビア語では Mihails Titovs、リトアニア語では Mihailas Titovas となる。ラトビア語とリトアニア語では文法性を決める語尾が人名にもつき、ラトビア語の-s、リトアニア語の-as はいずれも男性名の主格の語尾である。なおリトアニアでは、リトアニア語化された Mihailas Titovas でも、原語を転字した Mihail Titov でも、パスポートの記載方法は任意である。

ラトビアとリトアニアでは確認されなかったエストニアの事情として、結婚以外の理由でもロシア語風の名からエストニア語の名への変更をするロシア語系住民の存在が

挙げられる。その目的は、ロシア人であることに対する潜在的な差別を回避し、エストニア社会に溶け込んでいる印象を出すためである。

「ロシア人という理由で仕事に採用されないことがあった。ロシア語の名字を変えたほうがいいと勧められたこともあった」(Tartu80F)

「結婚をしてエストニア語の名字にしてキャリアがうまく作れた。ロシア語の名字で活躍している人を尊敬する」(Tallinn73F)

「1度目の結婚で-ичで終わるベラルーシの名字になったが、2度目の夫は-овで終わる典型的なロシア語の名字だった。響きが悪いということで名字の変更を申請し、エストニアに古くから住む親戚のエストニア語の名字になった。夫もその後その名字になった。今でも名字の変更を希望している人は意外と多い」(Tallinn69F)

一方でエストニア語の名字を持つ者には、それに“見合った”エストニア語能力が期待されるとするインフォーマントもいた。

「結婚してエストニア語の名字になったが、国家語試験の面接官に、“そういう名字だったら訛りなくエストニア語が話せないといけない”と言われて不合格になった。その面接官が民族主義的だっただけで、1週間後に再度別の面接官のもとで試験を受けたら合格した」(Tallinn76F)

人名は本人のアイデンティティに直結する問題であり、潜在的な差別を回避するために名字を変えることに倫理的な疑問を持つ意見もあった。

「名字を変えたところで、面接でエストニア語を話せばロシア人であるのはすぐにわかる。エストニア語をマスターすればいいだけのこと。本人の能力の方が大事。また今はエストニア人もロシア人もごちゃごちゃで、名前や名字は民族の指標にならないこともある」(Tallinn79M)

「父方のロシア語の名字を使っていた生徒が、母方のエストニア語の名字に変えていたが、他のクラスメイトはそれをからかっていた。普通の人なら名字を変えるなんてことはしない」(Tartu50F)

こうした現象がラトビアやリトアニアではエストニアほどは見られない理由としては、エストニア語がスラヴ諸語とまったく系統が異なり、スラヴ諸語起源の名字が目立つこと、ラトビアとリトアニアではスラヴ諸語起源の名字が必ずしも民族アイデンティティの指標にはならない傾向が強いためと考えられる。

2.4. 国家語による社会への同化と統合

国家語により多民族国家の統合を目指すバルト3国であるが、若い世代を中心に国家語

の知識は自明の理となっている。社会の一員としての意識が高く、民族の違いを日常で意識しない意見があった。実際にロシア語と国家語を自由に行き来する人もいる。

「統合が進んでいて、ロシア的なものはロシア語以外にはもう何も残っていないのかもしれない。多くの人は何人なのか区別がつかない」(Vilnius62F)

「妻がラトビア人で、娘たちはロシア語を知らない。家庭ではラトビア語を使う。娘に聞かれない話はロシア語です」(Rīga82M)

「海外に1、2週間行って、リトアニアに戻ってくるとリトアニア語を話したくなる」(Vilnius82M)

「カザフスタンに出張に行ったとき、周囲に聞かれない話は上司とリトアニア語で話した」(Vilnius82M)

「報道の仕方が言語によって違うので、ロシア語とラトビア語でニュースに目を通す」(Rīga80F)

子供や孫を持つ世代にとっては、幼稚園や学校など、どの段階から国家語で教育を受けさせるのかどうかといった問題がある。幼少期から彼らに国家語に親しませることで、かつての自分たちの世代のように国家語で苦勞をさせず、現地社会に溶け込むことが期待される。しかしその一方で、ロシア人としてのアイデンティティが薄らいでしまうのではといった危惧も聞かれる。

「子供の将来を考えてエストニア語で教育を行う学校に子供を入れるロシア人の親がいるが、子供はロシア語よりもエストニア語ができるようになるので、親子の間で距離が生じる」(Tartu74M)

「子供が通う学校は母親の影響で決まることが多い。自分は子供にはエストニア人の学校には通わせなかった。エストニア人になってほしくないから」(Tallinn69F)

「義理息子はエストニア人で、孫娘はロシア人学校に通い、孫息子はエストニア人学校に通っている。孫息子の方がエストニア人に近い」(Tallinn52F)

国家語は国民を統合する手段として機能しているのか。たとえ国家語ができたとしても民族の垣根自体はなくなるとし、統合に懐疑的な意見もある。

「エストニアの社会に頭が染まって、自分はエストニア人というロシア人もいるが、私はエストニア人にはならない」(Narva66M)

「エストニア語ができる自分の子供たちを誇りに思う。でもロシア人はエストニア人にはならない。統合はユートピア」(Narva49F)

「エストニア語ができてエストニア人には受け入れられない。会話がしやすくなったと感謝されるだけ。彼らは閉鎖的だけど、そこにこそ彼らの美学がある」(Tallinn60F)

独立時に若かった世代、または独立後に生まれ育った世代は現在、国家語の知識が当然の環境の中で暮らしている。ある子供や孫の世代が自分たちの世代よりも社会で生きやすくなっていることに対して嬉しく感じるインフォーマントもいる。

「ここにいることは私たちの罪ではない。純粹に（ソ連が）ひとつの大きな国だと思っていた。リトアニアに来たというよりも、自分たちの大きな国の一部に来たと思っていた。リトアニア人にとって自分たちが占領者だとは知らなかった。経済的に他の国に行くこともできない。子供と孫はリトアニア語とロシア語を話せ、完全に同化している。これは喜ばしいこと。なぜならこの国のれっきとした住民として胸を張れるから。私たちはそれができない。何語かにとらわれないことがいい。同化できない若い世代は他のヨーロッパの国に行く」（Visaginas62F）

3. まとめ

紙面の都合上、本論文ではすべてのインフォーマントの意見を反映させることはできないが、民族、言語、国家に関する今日のバルト3国のロシア語系住民の生の声を取りあげた。

独立回復後、基幹民族中心のネーション・ステートを建設するために国家語に託された象徴的な機能は、今日まで一定の役割を果たした。独立回復から25年以上が経ち、国家語がロシア語系住民にも一定以上解されるようになった現在、民族的出自に関わらず、国家語は国民であれば誰もが知っているべき“規則”のような側面がより強くなってきている。いわば、信号や道路標識といった、自動車や自転車を運転する者や歩行者であれば誰もが守るべき交通規則のように、国家語の知識とその使用の必然性はロシア語系住民自身にも年々共有されている。このように、現在のバルト3国では言語を民族に結び付けるかつての言説がやや影を潜め、言語を国家や社会に結び付ける言説が強まっている。独立回復後に民族のアイデンティティは安定したと言えるが、国家語を、とかく感情的になりがちな民族よりも国家や社会に結び付けた方が、国家語の必要性をロシア語系住民に対して正当化しやすいと言える。それでも、言語は具体的な民族やその文化と結びついていることから、国家語とロシア語の間で生まれる緊張関係や、一部のロシア語系住民の国家語に対する抵抗感や葛藤は依然存在し、今後も消えることはないだろう。

しかし、多民族社会の統合（または同化）は、若年層や社会的に活動的なロシア語系住民を中心に確実に進んでいる。彼らのように、母語としてのロシア語と国家語も使う言語のアイデンティティを持ち、「エストニアのロシア人」や「ロシア系エストニア人」のように民族のアイデンティティも保持しつつ、「エストニア国民」「ラトビア国民」「リトア

ニア国民」として国民のアイデンティティを持つ人は今後増加していくことが予想される。

ロシア語系住民の大半は民族的なロシア人であるが、実際のその民族的出自は極めて多様で複雑である。ソ連時代のロシア化政策で、民族の個別性は均質化されたとは言え、民族的には非ロシア人（例えばポーランド人やユダヤ人、またソ連邦を構成する共和国を持っていなかったその他の民族）の場合、彼らの母語となったロシア語や国家語に対する価値観はそれぞれで異なる可能性がある。今後は、従来ロシア語系住民の中でも多数派のロシア人の陰に隠れてきた他の民族にも着目することで、ロシア語系住民をめぐる問題の新たな研究の展望が期待される。

ロシア語系住民をめぐる問題は、独立国家となった中央アジアやコーカサスの国々でも多かれ少なかれ顕在化した、もしくは現在も顕在化している問題である。バルト3国において言語の問題は民族問題に関わり、常に政治的問題とされやすい。とりわけロシア語系住民が多いエストニアとラトビアの方では敏感なテーマである。さらにエストニアとラトビアのロシア語系住民を比較した場合、ラトビアの方がやや多いことから、彼らをめぐる問題が政治化されやすい可能性がある。今後はより詳細な国ごとの個別的な視点からの分析のほか、バルト3国全体や他の旧ソ連の国々における状況を俯瞰する対照的・包括的視点からの分析が求められる。

An interview-based study on the linguistic situation of Russian speakers in the Baltic states

Daiki Horiguchi

With the help of interviews, this paper aims to investigate the ethnic and national identities, as well as attitudes towards the Russian language and the state language, of Russian speakers in the Baltic states. After the collapse of the Soviet Union, a significant number of Russian speakers of various ethnicities, having Russian as their primary language, remained in the Baltic states. Meanwhile, each country has implemented a strict language policy in order to integrate its multiethnic society based on the state language.

Concerning ethnic identity, the Russian speakers have formed an identity that differs both from that of Russians in Russia and that of the titular nation of each Baltic state. Attitudes towards the state language vary: while some still object being compelled to learn it, others regard the state language positively, as a representation of their loyalty to the state and a means of integration into the society. Overall, the integration of the multiethnic society based on the state language is occurring among socially active Russian speakers and those of the younger generation.

key words: Baltic states, Russian speakers, state language, identity